

第2章 チョロのイメージと有力者たち

キーワード：チョロ、表象、アイデンティティ

佐々木 直 美*

The Images of *Cholo* and Political Leaders in Peru

Key words : *cholo*, representation, identity

SASAKI Naomi

Since the 1950's, increasing migration from Sierra to Costa, especially to Lima, has impacted on Peruvian society. The economic and cultural activities of immigrants have encouraged the appearance of a new social actor, who is called *cholo*. Also, politically, the word *cholo* was used strategically by President Alejandro Toledo during his presidential election in 2000. *Cholo* is the one of the most important words to understand in Peruvian society. This article aims to clarify its historical meaning and to study the effect of ethnic factors on the presidential election of 2000.

According to the chronicles of the 16th century, *cholo* originally referred to a kind of dog, probably a mongrel dog. Then it became the term for a child of mixed race who has Andean aborigine blood. *Cholo* has never been used as a technical term for classification in the social hierarchy, but has been a word that indicates ethnicity. Therefore, it reflects feelings of the people who use the word and it is sensitive. In Peruvian history, the word *cholo* was always used as a disparaging term : an insulting remark.

In contrast, during the campaign for the presidential election in 2000, "*cholo*" was used with a positive meaning by Toledo. Toledo insisted on his ethnicity and appealed to the people for their support, calling himself *cholo*. Toledo won the election. It is interesting to examine how his ethnicity influenced voters. I conducted 31 interviews with people of the electorate. Many people said that the ethnicity of the president was not so important. An interesting thing is that despite the ordinary, insulting meaning of *cholo*, the majority did not show sensitivity to this word. This means that ethnicity and the word of *cholo* did not have centripetal force in the election. The main reason for Toledo's victory lay in other social and political factors.

* 法政大学法学部

はじめに	Ⅲ. 2000年の選挙におけるチョロ像
Ⅰ. 植民地期のチョロ	Ⅳ. 「大統領はチョロであろうと無かろうと…」
Ⅱ. チョロと呼ばれた権力者たち	おわりに

はじめに

筆者は、1998年5月19日から1999年4月5日と2000年8月1日から9月21日¹⁾の二度にわたり、ペルーにおける「チョロ (cholo)」という言葉の意味とその表象について現地調査を実施した。1950年代以降の都市への移住者急増とその当事者である地方出身者の社会・文化・経済活動は、ペルー社会に強烈なインパクトを与え、新たな社会的主体の出現を印象付けた。この現象を社会学者や人類学者は「チョロ化 (cholificación)」と呼んだ。そのなかでも活発な経済活動を行っている人々は「新興チョロ (cholo emergente)」と呼ばれ特別な関心を集めた。しかし、チョロへの関心は研究者に限ったことではない。たとえば、インターネット上では若者を中心に「チョロ度」を測定して遊ぶ「チョロ計 (cholómetro)」²⁾なるものが存在している。また、政治の場面も「チョロ化」に無関係ではない。そこで本章では、チョロの意味を有力者との関係から歴史的に検討し、最後に2000年の大統領選挙キャンペーンにおけるエスニシティ戦略の効果について考察する。

Ⅰ. 植民地期のチョロ

スペイン語の規範を示すスペイン王立アカデミー (REA) の『スペイン語辞書』によるとcholoとは「1. ヨーロッパと先住民の血の混血 2. ヨーロッパの習慣を受け入れたインディオを指す」とあり、ペルー特有の表現として「チノ・チョロ：インディオとネグラ (黒人女) またはネグロ (黒人男) とインディア (インディオ女)

1) 2000年の調査に関しては法政大学の特別研究助成を一部受け実現した。

2) 「Cholómetro」をキーワードにインターネットで検索すると、ペルー版 (<http://www.cayetano-pae.org/cach-149.htm>, 2002年11月15日) だけでなく隣国のエクアドル版 (<http://www.super949.santnet.net/hch2.htm>, 2002年10月26日) を確認でき、その質問内容が多く重複していることから「トランスナショナルなチョロ」を想定できて、興味深い。また「チョロ」あるいは「チョラ」の比較研究としてボリビアも対象とした考察は今後の研究課題としたい。

の子孫を指すことば」が同時に紹介してあるRAE 2001]。

また、『ペルー語彙辞書』によると「(おそらくモチエ³⁾のことばで若い男性を指すcholuが起源かもしれない。)白人とインディオの混血。白人のような服装をし、そのような生活をするインディオ。家内労働をする若いインディオ。家族や友人に呼びかける愛称：なあ、チョロ、俺を訪ねて来いよ。」と説明し[Ugarte 1997]、先の『スペイン語辞書』と、一致して身体的あるいは文化的にヨーロッパのものを受け入れたインディオとして現代の解釈を提示している。

では、チョロの語源は何か。『ペルー語彙辞書』は既に見たとおり、「cholu」に由来すると示唆しているが、他にもいくつかの説があり、現在のところ語源に関しては不明である[Varallanos 1962: 21-36; Vilcapoma 2002: 295]。

本章では、人種と混血が大きな社会的意味を持った植民地期のチョロの意味から考察を始めたい。そこで植民地期のクロニスタ(記録者)の記述を見ると、『インカ皇統記』(1609-17)を記したガルシラソ・デ・ラ・ベガは「さまざまな人種につけられた新たな呼称について」の章で次のように記している。

旧世界から行った黒人に対してはネグロまたはギネオと呼ぶ。ネグロとインディア(女)、あるいはインディオとネグラ(女)の子をムラトあるいはムラタ(女)と呼ぶ。かれらの息子たちはチョロと呼ばれるが、これはバルロベント諸島⁴⁾のことばであって、イヌを意味する。しかしこれらは純血種ではなく、非常にあやつりにくくよく吠えるイヌを指し、スペイン人は汚名や罵倒としてこのことばを使っている。[Garcilaso 1976: 266] ()内引用者

ここでは、「純血種ではないイヌ」つまり雑種犬が語源であり、それが人間の混血に対しても蔑称的に使われたと言っている。しかし、その混血の組み合わせが注目される。現代の辞書の説明とは異なり、ここではインディオとネグラあるいはネグロとインディアの間のできた混血の子孫がチョロとあるため、そこに白人あるいはスペイン人の血が入らない可能性がある。Mulatoという語自体、現代の「黒人と白人の間に生まれた者」[REA 2001]という意味とは異なるため疑問が浮かぶところではあるが、「当初はあらゆる混血に対して用いられた」[REA 2001]との注釈があるので、ガルシラソによるムラトの解釈もあながち否定できない。少なくとも

3) ペルー北海岸に100-800年ころに栄えた文化。

4) 小アンティル諸島の一部。グレナダから北西にある島々を指す。

もガルシラソによる解釈では、チョロはネグロとインディオの血をともに受け継ぐ混血と理解できる。

ガルシラソとほぼ同時期に生きたもうひとりのクロニスタ、ワマン・ポマ・デアヤラ（以後、ポマと略記）には次のような文章がある。

インディオたちは良い猟犬を飼育しなければいけない。

鹿やビクーニャ、グアナコ、リヤマ、アルパカを狩るためのイヌである。そして狩猟をするグレーハンド、牧羊犬やチョロ、インカのイヌなどを飼わなくてはならない。[Guaman Poma 1980b : 851, 865]（ページ数は原書の項番号、イタリックは編者による項番号、以下同様）

ガルシラソとポマはともにインカ帝国征服直後に生を受け17世紀始めに亡くなっている。二人の記録から16世紀後半から17世紀始めにかけて、チョロがある種のイヌを指していたことが明らかである。しかし問題は、それが人に対して使われた場合にある。ガルシラソによると、ネグロとインディオの血を引くムラト／ムラタの子がチョロと呼ばれるわけだが、ポマの理解とは異なるようだ。ポマの記述では、基本的にメスティソは白人とインディオの混血、ムラトは白人と黒人の混血を示していると考えられ⁵⁾、メスティソとムラトを一対にして記述していることが多い。しかし、およそ1170項にもおよぶ記述の中にチョロという語は数えるほどしか出てこない⁶⁾。その中でもチョロがいかなる混血の組み合わせなのかを示唆されている

5) たとえばメスティソについては

「(インディアたちは) もはやインディオではなくスペイン人を好み、とんでもない売春婦になってしまったおかげで、この地において悪いカスタであるメスティソばかりを生んでいる。」[Guaman Poma 1980b : 539, 553, 929, 943]

ムラトに関しては、スペイン本国生まれの生粋のスペイン人に言及する際に次のような表現をしている。

「…メスティソでもクワルテロン（4分の1）でもなく、クリオリヨでもムラトでもないカスティリヤで生まれたスペイン人女性やスペイン人男性が居るということです。」[Guaman Poma 1980b : 946, 960]

また、メスティソとムラトの図参照 [Guaman Poma 1980b : 505] 数字は著者による項番号、イタリックは編者による項番号を指す。ただし、ムラトの使い方には黒人とインディアの混血を指すような記述もわずかにある。[Guaman Poma 1980b : 710, 724]

6) 筆者が確認できたのは以下のとおり、ページ番号の部分は著者による項番号、イタリックは編者による項番号を指す。：① [Guaman Poma 1998b : 526, 540], ② [Guaman Poma 1998b : 533, 547], ③ [Guaman Poma 1980b : 566, 580], ④ [Guaman Poma 1980b : 851, 865], ⑤ [Guaman Poma 1980b : 861, 875], ⑥ [Guaman Poma 1980b : 977, 995], ⑦ [Guaman Poma 1980b : 1103, 1113], ⑧ [Guaman Poma 1980b : 1115, 1125], ⑨ [Guaman Poma 1980a : 図673], ⑩ [Guaman Poma 1980b : 816, 830], ⑪ [Guaman Poma 1980b : 213, 215]

箇所は非常に少なく、具体的には次のような箇所である。

・・・わたしはサン・クリストバルの村に行くことを思い出しました。そこで10人のインディオ頭であるファン・キリュというあるインディオに出会った。・・・このインディオ頭の妻はスペイン人のカスタ（血統、身分階層）であり、その嫡出子である娘はチョロ、メスティソのカスタであった。[Guaman Poma 1980b : 1103, 1113] () 引用者

この文章によると、チョロは、インディオとスペイン人の混血ということになるだろう。しかし、次のような文章もある。

スペイン人が都市や町、村でインディオと一緒に定住できないこと、そして、いかなるスペイン人の男女も、メスティソも、ムラトもサンバイゴもチョロも住めないというのはきわめて適切なことであり、神と陛下のご厚意によるものである。もしこの王国でスペイン人女性またはメスティサ(女)、ムラタがインディオと結婚したならば、前述のスペイン人たちは、インディオの村から1レグアではなく一日の旅程のところ自分に村を作るべきである。そして、もしもメスティサがチョラを出産したら、彼女たちのスキャンダルになるため都市に連れて行くのが妥当である。

このことについて申し上げる：一つは、彼らがインディオの妻や娘たちを奪い、多くのメスティソやチョロたちを育てているということ。[Guaman Poma 1980 b : 533, 547] () 内引用者

これによると、メスティソ女性とインディオの子がチョロということになる。さらには次のような箇所もある。

・・・上級裁判官や聴罪司祭、伝道師、エンコメンデロ⁷⁾や彼らのすべての息子や兄弟、そしてスペイン人と彼らが所有する黒人が、インディアと内縁関係を持っている。こうして多くのちっぽけなメスティソの男女、チョロやチョラが出てくるのだ。[Guaman Poma 1980b : 861, 875]

7) スペイン王権により新大陸における一定地域の原住民に対する義務と保護を信託された個人。

この箇所では、「スペイン人と黒人がインディオ女性と内縁関係を持ち、結果、メスティソやチョロが出てくる」と述べているため、チョロは黒人とインディオ女性との混血とも考えられる。ガルシラスと同様にポマの記述からも、チョロがインディオと非インディオが混血した一部のカスタを示していたことは明らかである。それは血統と家柄にかかわる社会的地位を示すカテゴリーである。

しかし、これまで見てきたとおりインディオに混ざる血がスペイン系か黒人系か、さらにその割合については、二人のクロニスタの間にも、さらにポマ自身においても整合性を欠いていると言える。この意味の揺らぎ自体が、チョロという語の一番の特徴であり、結局は現在においてこの語が流行といってもよいほど氾濫している所以ではないだろうか。植民地期の詳細なカスタ分類体系の存在は有名であるが、既に指摘しているとおりその分類が厳密に適用されていたかは疑わしい [Mörner 1967; 大貫1992]。したがって、慣用的には「インディオ系」混血者という意味で植民地期当初は使用していたと考えられる。

この語が持つ多義性については、チョロの語源と意味の歴史の変遷について論じている先行研究からも確認できる。それを簡単にまとめると、チョロはあらゆるタイプの混血に対して使われており、16世紀から17世紀初頭は、メスティソまたはネグロとインディオとの混血を指していたものが、18世紀になると、インディオとほぼ同義語に使われている例もあるが、次第にメスティソとインディオ女性の子に限定して使うことが定着された [Varallanos 1962: 21-36; Vilcapoma 2002: 294-297]。さらに現代では、チョロは白人とインディオの混血、つまりメスティソと同義語とも説明されているが、これもチョロのカテゴリーにとって核となるのは「インディオ」であることを思い出せば根本的な変化ではないだろう。

II. チョロと呼ばれた権力者たち

チョロの語は厳密な制度的分類用語としてではなく、便宜的に身近な呼称として使われながら長い歴史を経てきたと考えられる。アイデンティティに関わる呼称であり、しかも日常的に使用されてきたからこそ、人々の感情が投影され人間関係にも関わるデリケートなことばになったと考えられる。

ペルーの作家リカルド・パルマ (1833-1919) の代表作『ペルー伝承集』の中に「ペリチョリの天分」という章がある。「ペリチョリ」とは、植民地末期のペルーで活躍したリマ生まれの舞台女優ミカエラ・ビリエガスの渾名である (図1)。

バルマによると、この渾名はミカエラを寵愛した副王マヌエル・デ・アマットが二人の諍いの際に発した「¡perra-chola (雑種の雌イヌ) !」に由来する、という。副王のカタルーニャ訛りと、老齢のため歯が抜けてしまった口から発せられたことにより「perra-chola」が「perri-choli」に変わってしまったと説明してある⁸⁾。

このようにチョロの語が感情を反映するからこそ、この語は死語となることなく新たな解釈をうむ生きたことばであり続けるのであろう。当初から付された「雑種」「インディオ系」といった意味を保持しながらも、そのことに対する人々の感情を含めた評価次第で、チョロは意味とニュアンスが変化する呼称となった。



図1 「ラ・ペリチョリ」ことミカエラ・ピリエガス

19世紀に入り、ラテン・アメリカ諸地域で独立の気運が高まり、先住民や混血者が参加する政治運動が表面化してきた。さらには新生国家形成に際し、奴隷制とカスタの廃止が混血者に新たな社会進出の機会を生み、国民創造の過程で混血に対する評価も変化してきた [大貫 1992]。権力者とチョロが結びつくのもこの時期からである。

ラテン・アメリカ独立の英雄であるアルゼンチンの軍人サン・マルティン (1778 - 1850) は、両親ともにスペイン人 (白人) であったにも関わらず、彼はインディオ的なワシ鼻と浅黒い肌を持ちその混血的風貌によって、「エル・チョロ」と呼ばれていた (図2)。しかし一方では、サン・マルティンは1821年にリマを攻略してペルーの保護者となるが、リマの貴族からは軽蔑的に「クヨ⁹⁾のネグロ」と呼ばれていた [Vilcapoma 2002 : 296]。

8) Perri-choliの由来に関しては他にも説がある。たとえば『ラテン・アメリカを知る辞典』によると「<私の宝>を意味する賛辞からきた名」 [大貫ほか監修 1994 : 373] と解説してある。また、「陽気な妖精」を意味するとの説明もある [Vilcapoma 2002 : 295]。

9) サン・マルティン将軍がアルゼンチン独立のため、アンデス超えの作戦を準備した地。



図2 ホセ・デ・サン・マルティン

このようにチョロとネグロという呼称が同一人物に対して使われていた例はほかにもある。1829年から4年間ペルー大統領の任期をまっとうし、再び1840年に大統領職についたものの、翌年戦死したアグスティン・ガマラ(図3)の場合、リマの貴族たちからは「吐き気のするチョロ」と軽蔑され、他の人々からはサンボとも呼ばれていた。また、1930年に革命の狼煙を上げ、レギーア政権崩壊後に政権を握った軍事委員会の首班を務めた軍人、ルイス・サンチェス・セロは(図4)、その浅黒い肌と風貌からチョロともネグロとも呼ばれていた[Vilcapoma 2002: 296]。このように、チョロの語はインディオ系混血の呼称として多分に侮蔑のニュアンスを含みながら使用されてきた¹⁰⁾。



図3 アグスティン・ガマラ



図4 サンチェス・セロス

10) このほかアンデスの高地プノ県出身で、1862年に大統領に就任したが1863年死亡したミゲル・デ・サン・ロマンも「チョロ」と呼ばれた有力者の一人である[Tamariz 1995: 76-77, 94-95]。

Ⅲ. 2000年の選挙におけるチョロ像

2000年に実施された国会議員および大統領選挙においてはチョロであることを積極的にアピールしながら選挙戦に望んだ候補者が複数存在した¹¹⁾。なかでも最も注目を集め、勝利を取めたのが現大統領アレハンドロ・トレドである。トレドの場合、インカのイメージに重ね合わせた選挙キャンペーンが話題を呼んだが、「インカ再来」の演出と同時に、たとえば「チョロ賛成、人種主義反対! (¡cholo sí, racismo no!)」の標語を掲げてチョロであることへの肯定も強く利用されていた [Vilcapoma 2002: 302]。その他にも、キャンペーン中に販売されていた冊子『アレハンドロ・トレドの真実の歴史』では、白いワイシャツにネクタイ姿のトレドがアンデス先住民を象徴する毛糸の帽子チュヨを被っている写真が表紙を飾っている (図5)。

権力者あるいはエリートのシンボルであるネクタイ¹²⁾と、アンデス先住民の日常着の一部であるチュヨとの組み合わせは現代のチョロ像を明確に表象している。チョロ化あるいは新興チョロが研究者のみならず広く一般にも関心を集めるのは、それが、伝統的白人エリート層による支配への政治・経済・文化的挑戦だからだといえるだろう。フジモリ前大統領が初当選した1990年の大統領選挙におけるエスニックな要素について分析したデグレゴリも、市民権の要求と差異としてのエスニシティの表明はペルーにおいて一種の抵抗である、

と既に指摘しているとおりである [Degregori 1990: 109]。

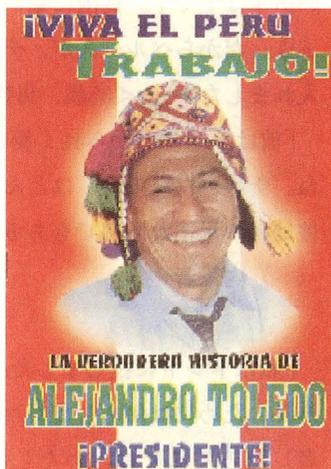


図5 アレハンドロ・トレド選挙キャンペーン用冊子

結果的にトレドは大統領の座に就いたが、演出されたチョロ性も含めてトレドがチョロであることは、どの程度得票に影響したのだろうか。政権交代が実現した直後の2000年8月、筆者は「政治家が利用するチョロ・アイデンティティ」に関する

11) 2000年以前にもチョロであることを演出しながら選挙に臨んだ候補者に1939年のDoña Teresita Arceの例がある [Vilcapoma 2002: 29]。しかし、2000年には同時に複数の「チョロ候補者」が登場し、マス・メディアの話題となった。たとえば国会議員に立候補したタレントらチョロ・シリロや、チョラ・エネルヒーア、チャト・グラードらが出た。

12) チョロ・シリロは2000年の選挙キャンペーン中、伝統的政治家を批判しながら「ネクタイと背広にはもう、うんざりだ!」と表現した。

予備調査を実施した。場所は首都リマ市のほか、シエラ出身者の大きな受け皿であり同時にトレドゆかりの地であるチンボテ市、インカ帝国の首都クスコ市、北海岸の商業都市チクラヨ市の4都市にわたるが、各広場で無作為に選んでインタビューできた人数は31名と少なく、この資料だけで数量的な分析は到底できない。しかし、対面しながらの聞き取り調査によって得た一人一人の有権者の声から、チョロ性を戦略的に用いた候補者や彼らを担ぎ出した政治グループの思惑に対する有権者側の反応の一部を垣間見ることは可能であろう。

チョロを自称し、そのことをアピールした候補者は民衆の次のような声を期待したであろう。

「いま、貧しい人たちがたくさんいます。チョロの大統領なら自分の過去を思い出すはずです。貧困に喘いでいる多くのペルー人や民衆のことを思い出すでしょう。だからペルー人が、チョロが大統領になれば嬉しいですね。私はトレドに入れましたよ。」<35歳、男性、靴磨き、チクラヨ市近郊在住>

「彼はチョロだから良く働きます。トレドは雇用を提供するって言いましたしね。チノ（フジモリ）はとんでもないことをしました。私はトレドに入れました。彼は私の母親と同郷でもあるのです。」<26歳、男性、行商、チンボテ市在住>

（ ）内筆者

「私はトレドに投じました。変化が欲しかったのです。フジモリは10年間チクラヨのためには何もしてくれませんでしたから。トレドがセラーノ（山岳部出身者）だってことは、わたしには大きく影響しましたよ。」<68歳、男性、農業、チクラヨ市近郊在住>（ ）内筆者

「国民の大多数がチョロだからチョロであることは有利かもしれない。私はトレドに投票しました。」<38歳、女性、主婦、クスコ市在住>

しかし、「チョロであることは政治的に有利か」との問いに対し「有利である」と答えた人は31名中11名であった。

『「チョロ」ということばで勝利できます。（トレドに関して言えば）彼が本当のチョロかどうか、本当に自分の祖国のために思っているかについては、大統領

になってみないとわかりません。私はトレドに入れました。あれだけキャンペーンもやって公約もしたし、チュヨをかぶってやって来たし……。』<49歳、男性、農業、クスコ県農村在住> () 内筆者

「本当のチョロ」について別の有権者は語る。

「チョロであることは有利です。なぜなら純粋なペルー人ってことです。初戦ではトレドに投じましたが、彼はあまりにもいろんなことを言い出したので、その後考えを変えました。『やっぱりチノのままが良いわ』って。だって状況は良かったのですから。』<40歳、女性、網職人、チンボテ在住>

「田舎で暮らしてきた生粋のチョロなら共感を呼びながら（チョロであることを利点に）できます。でも、選挙のためだけにそれを利用するのはよくありません。トレドはうまく利用しようとしたですよ。ここにはトレド派もフジモリ派もありません。あるのは、政府に反対する反フジモリ派だけです。彼はそんな状況を利用しようとしたのです。…私はフジモリに投票しました。何よりも私個人は経済的に安定していましたからね。」

<28歳、女性、事務、クスコ在住> () 内筆者

「チョロ性」を演出することは、「地方の農村」や「貧しい暮らし」そして「ペルー人であること」への共感と一体感をアピールすることとして、有権者側にも認識されている。選挙における「チョロ性」の利点が肯定されるはそのためである。しかし「チョロ性」が有利に働くとしても、それが決定的要因ではないことが証言されている。

「場合によってはチョロであることは有利でしょう。もしチョロのような純粋なペルー人自身が（大統領に）なれば嬉しく思います。トレドには矛盾があります。最初は良い政治家のように見えたのですが、時間がたつてくるといろんな矛盾が浮き彫りになってきました。…私はチノに投票しました。他の選択肢がなかったからです。彼も他の人たちと同様間違いも犯しましたが、大体においては好意もっています。』<30歳、男性、セールス、リマ市在住> () 内筆者

チョロ候補者に付加価値を認めた人々は、「チョロ」について「純粋なペルー人」であり「農村の貧しい生活を体験的に知る庶民の理解者」と認識しているといえるだろう。

IV. 「大統領はチョロであろうと無かろうと・・・」

植民地期より「インディオ系」への蔑称として使われてきたチョロということばが、2000年には選挙に有利な要素として利用された。トレド陣営からは「チョロ賛成、人種主義反対！」のスローガンも打ち出された。

しかし実際にこれを実践したのは、選挙戦で「チョロ性」をアピールしたトレド本人よりも、その演出を冷やかに見ていた有権者のほうかもしれない。

「チョロかどうかは選挙において全く関係ありません。チョロであろうとグリーンゴ（白人）であろうと、チノであろうと。重要なのはその人物の人間としての素養です。なぜなら神にとって私たちはみな人間であり、人種なんて無いのですから。」<56歳、男性、従業員、リマ在住>（ ）内筆者

「チョロであろうと、インディオであろうと日本人であろうと、なんであろうと同じです。個人を尊重すべきです。私はフジモリに投票しました。少なくとも学校の子供たちのためには何かをやってくれましたからね。」<38歳、女性、主婦、リマ市郊外在住>

このような意見を持つ有権者はフジモリに投票した人たちばかりではない。変革を望むとの理由からトレドに一票投じた人も少なくない。

「チョロかどうかなんて重要ではありません。別問題です。重要なのは国民の利益を守ることです。その素養が重要なのです。単にチョロとして一体化して何かになるうってというのは駄目ですよ。私はトレドに入れました。変化を望むからです。現政権は10年になりますからね。」<30歳、男性、教育関係、ワラス在住、リマにて>

「(政治家たちがチョロであることをアピールするのは) ペルーの血との一体化

を示すためです。でも、そんな戦略は効果がありません。そうでしょう。そんなやり方ではなく国民の心に届く別の方法があると思います。…チョロだろうとセラノだろうとそのことは私には関係ありませんでした。私はトレドに入れましたよ。変化を望んだからです。」<36歳、女性、販売業、カハマルカ在住、チクラヨにて> () 内筆者

「一度目はトレドを支持しましたが、二度目は白票を投じました。ペルーには変化が必要です。」<38歳、男性、記者、クスコ市在住>

エスニシティは関係ないとする有権者が望んだ「変化 (cambio)」の内容はどのようなものであろうか。

「必ずしもチョロでなくていいのです。重要なのはわれわれに民主主義と仕事を与えてくれることです。」<40歳、男性、従業員、チンボテ市在住> 「問題は能力、仕事振りです。私はフジモリに投票しました。彼は充分支援し、以前は無かった道路が建設されました。」<25歳、男性、運転手、チンボテ在住>

チョロはそのコノテーションによって様々な使われかたをしてきた。そしてそれが政治的に利用される場合の現在の意味を明確に捉えた有権者がいた。

「チョロとは抑圧され、中央集権によって疎外された人々のことです。候補者たちはそれらチョロのリーダーになろうと目論んだのです。」<38歳、男性、記者、クスコ市在住>

中央権力から「疎外された者」としてあるいは「ペルー人そのもの」の同義語としてチョロの語は理解され、利用されているのが現状である。しかし、チョロの語は特定の社会集団の利害と絡む明確な一般的定義を持っていない状況において、選挙戦では期待されたほどの求心力を持ちえなかったと考えられる。したがって、このことは大統領選挙におけるトレドの大きな勝因が、チョロ性やインカを強調したイメージ戦略の効果以外にあることを示唆すると言えるだろう。

「わたしはチョラではありません。そのことばは嫌いです。…私はペルー人で、セラナ (山岳地域出身者の女性) だけど、チョロということばは嫌いです」<51

歳、女性、公務員、チンボテ市在住」と述べた人は、反トレドのフジモリ支持者であった。「ちゃんと政治をやっている間は、チノで良いと思います。彼には政治を行う資格がないと人々は言っていますが、どうしてでしょう。ちゃんとやっているなら良いじゃありませんか。一所懸命に愛情をもって国を治めてくれる人なら誰であろうと私には同じです。私はフジモリを尊敬しています。私はセラーナだからトレドのシンパになるべきかもしれませんが、私は反トレドです」と彼女は続けた。

おわりに

ペルーでは1950年代以降の急激な都市化にともない、チョロたちの存在が注目を集めてきた。そこで本章ではチョロということばの意味について歴史的に検討し、さらに「チョロ性」が積極的に利用された2000年の大統領選を取り上げ、現代ペルーにおけるチョロの意味を考察した。16世紀後半から17世紀始めにかけて、チョロとは、ある種のイヌを指すことばとして使用されていたことが二人のクロニスタ、ポマとガルシラソの記述から明らかになった。しかし、それがヒトにも適用されたときどの組み合わせの混血を指すかについては、それぞれ異なった見解で記されており、共通しているのは「インディオの血を引く混血」ということであった。しかも、チョロということばは、イヌを指すことばであったことから推察でき、さらにチョロと呼ばれた権力者の例が示した通り、軽蔑的なニュアンスを含む蔑称として用いられてきた。単に人種的な特徴を指すことばではなく、「インディオ系」であることへの感情が込められた他称として、である。

ところが2000年の大統領選挙において、トレドはチョロということばを自称として積極的に使用した。チョロを積極的に名乗り、チョロ性をアピールすることが政治の場面にいかに影響するのか、この疑問を考察するための第一歩として、本章の後半では有権者へのインタビュー結果をまとめた。

集った声は、選挙においてエスニシティをアピールすることに対し賛否両論に分かれた。賛成者は、トレドがチョロであることで親近感を抱き期待した。反対意見の人々は、チョロ性は選挙には無関係との考え方を示した。しかし、両方の立場に共通するのは「チョロ性」それ自体は否定的に捉えないということである。このことは、長い間否定的に捉えられてきた「チョロ性」に対し、現在、再評価の認識が一般に浸透してきている結果と言えらるだろう。

今回は非常に限られた数のインタビュー結果に基づくため、量的な分析はできな

かったが、しかし、有権者がトレドの「チョロ性」にいかに関与されたか、あるいはされなかったかという具体的な意見をもとに2000年の大統領選挙におけるエスニシティの影響についてわずかな考察を加えることができた。1990年にフジモリが白人エリートのバルガス・リョサ候補を破り当選した際、その勝因にエスニシティも大きな意味を持った [Degregori 1990]。しかし2000年の大統領選挙では、「チノ」と「チョロ」のエスニシティは「白人」と「非白人」の対立ほど象徴的ではなくエスニシティの違いにそれほど重要な意味を持たなかったことが考察の結果みえてきた。チョロは蔑称として使われてきたからこそ政治的メッセージをおびて利用されやすい。しかし実際の効果はトレドが期待したほど大きくはなかったと言えるだろう。

容赦なく進行するグローバル化の中で、ペルー社会においてエスニシティはどのように立ち現れ、国民国家の形成と維持に関与してくるのか。この点に注目しつつ、ペルー社会におけるエスニシティ表象とその効果について今後の研究を進展させたい。

参考文献・資料

- Degregori, Carlos Iván y Romeo Grompone
1990 *Demonios y redentores en el nuevo Perú : una tragedia en dos vueltas*, Lima : Instituto de Estudios Peruanos (IEP) .
- Garcilaso de la Vega, Inca
1976 *Comentarios reales de los Incas*, Caracas : Biblioteca Ayacucho. (牛島信明訳『インカ皇統記2』大航海時代叢書エクストラ・シリーズ2、1986年、岩波書店)。
- 増田義郎・柳田利夫
1999 『ペルー太平洋とアンデスの国—近代史と日系社会—』中央公論新社。
- Mörner, Magnus
1967 *Race Mixture in the History of Latin America*, Boston, Mass. : Little, Brown and Company.
- 大貫良夫編
1992 『民族の世界史13 民族交錯のアメリカ大陸』山川出版社。
- 大貫良夫・落合一泰・国本伊代・福島正徳・松下洋監修
1999 『ラテン・アメリカを知る辞典』平凡社。
- Palma, Ricardo
1994 *Tradiciones peruanas (selección)*, Carlos Villanes Cairo ed., Madrid : CATEDRA.
- Poma de Ayala, Felipe Guamán
1980a *El primer nueva crónica y buen gobierno*, México, D.F. : Siglo Veintiuno.
1980b *Nueva crónica y buen gobierno*, Caracas : Biblioteca Ayacucho.
- Real Academia Española
2000 *Diccionario de La Lengua Española*, Madrid : Real Academia Española.
- 染田秀藤・友枝啓泰
1992 『アンデスの記録者—ワマン・ポマ：インディオが描いた<真実>—』平凡社。

- Tamariz L., Domingo
1995 *Historia del poder : elecciones y golpes de estado en el Perú*, Lima : Jaime Campodonico Editor.
- Ugarete Chamorro, Miguel Angel
1997 *Vocabulario de peruanismos*, Lima : Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Varallanos, José
1962 *El cholo y el Perú*, Buenos Aires : Imprenta López.
- Vilcapoma, José Carlos
2002 *El retorno de los Incas : de Manco Cápac a Pachacútec*, Lima : Universidad Nacional Agraria La Molina.

図版出典 番号は図版番号を表す

1. MILLA Batres, Carlos, *Diccionario histórico y biográfico del Perú*, Lima : Editorial Milla Batres, 1986.
2. <http://www.puc.cl/faba/ARTE/AUTORES/GilObrasI.html>
3. TAMARIZ L., Domingo, *Historia del poder : elecciones y golpes de estado en el Perú*, Lima : Jaime Campodónico Editor, 1995.
4. 増田義郎・柳田利夫『ペルー太平洋とアンデスの国—近代史と日系社会—』中央公論新社 1999。
5. GRADOS LAOS, Fernando *La verdadera historia de Alejandro Toledo*. Lima : Perú Posible (?), 2000.